

氏名	清水邦彦			
学位の種類	博士（歴史民俗資料学）			
学位記番号	博乙第51号			
学位授与の日付	2016年3月11日			
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当			
学位論文の題目	日本に於ける地藏信仰の展開 —祖師から民衆まで—			
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授	佐野賢治
	副査	神奈川大学	教授	小熊誠
	副査	神奈川大学	准教授	前田禎彦
	副査	駒澤大学	教授	池上良正

【論文内容の要旨】

現代の日本に於いて、インド起源の仏教菩薩である「お地藏サマ」が路傍に祀られていることはありふれた光景である。路傍の神仏は、道祖神や庚申など地藏に限らないがその数は圧倒的である。このためか仏像（もしくは神像）が、形態は地藏ではないにも関わらず、地域住民により「ジゾウ」と呼ばれることがあるほど、日本人にとって最も身近な菩薩像であり、公有地に地藏を祀ることも合憲とされている。本論文は、日本に於ける地藏信仰の展開を法然・親鸞・道元・栄西・一遍・日蓮ら祖師・仏教者サイド、仏教思想とその教化の側面と、受容する側の民衆における民俗信仰との習合という視角から、時代的には、地藏信仰の庶民化が認められる中世から江戸時代を中心に、地藏信仰が日本人に受容される過程をその間を仲介した「唱導僧」の動向、活躍にも目配りしながら明らかにする。

地藏は、インドの大地神を仏格化したものであり、後期大乘仏教運動の中で生み出された。その像容は部派仏教と大乘仏教との止揚を目指した菩薩と解釈され、経典において僧形とされたため地藏像は菩薩でありながら、生身の人間の修行姿、僧形で象形されることが多かった。中国唐・宋代において、地藏は小僧の姿で現れ、人々を冥界・地獄より救済し、天もしくは西方浄土へ導く存在とされた。日本では、天平時代に地藏の観念は伝わり、10世紀以降、地藏信仰が普及し始める。『今昔物語集』の地藏説話において、地藏は小僧の姿で現れ人々を冥界・地獄より救済し西方浄土へ導く存在としてしるされた。従来、地藏菩薩の「小僧の姿」及び「西方浄土への引導」は地藏信仰の日本的展開の特徴とされてきたが、本論文では、この二点は中国でも認められることを明らかにした。

中世に至ると、法然・親鸞の登場により地藏信仰は、現世利益中心として説かれたとの先行研究を子細に検討し、鎌倉仏教各宗派の祖師に於ける地藏の位置付け及び地藏に関する文学・遺品を分析することで、中世社会においても地藏は、死後の救済、「後生善処」の功德を有していたことを論証する。中世の史資料の記述では、地藏菩薩は小僧など「生身」の姿で現れ、死にゆく人、地獄に落ちた人間を直接的に救済してくれる存在であった。この親しみやすい性格が地藏信仰の

伝播、庶民化の大きな契機になったことを指摘する。

江戸時代の地蔵信仰に関して、渡浩一は、地蔵説話を数的に分析し、地蔵信仰の現世利益的性格を同様に指摘している。江戸時代になると、路傍に地蔵を立てることが一般的に普及するようになる。これは道祖神信仰との習合に拠ると従来は解説されてきたが、特定の地域（東京 23 区域・京都・石川県金沢市）の路傍の地蔵信仰を詳細に分析すると、死者供養を目的に祀られるものが圧倒的に多いことが証され、道祖神信仰との習合説に再考を求める。また、江戸期に流行した「賽の河原地蔵和讃」は、地蔵は亡くなった子どもを救済する仏として登場する。江戸時代の地蔵信仰は現世利益中心となったとの通説に対し修正を加え、地蔵信仰の現世利益と死後救済「後生善処」の両面から江戸期の地蔵信仰を再考した。

地蔵菩薩に対する信仰には中世来、人の姿に似た生身で直接的に死者救済を行うという観念が基調に流れ、それは路傍の地蔵像にも影響を及ぼしていたといえる。こうした地蔵信仰は、形を若干変えつつ、明治時代以降現在に至るまで連綿と継承されている。1970 年代に生じた水子供養ブームに於いて、水子の靈魂の救済に大きな役割を担ったのは地蔵菩薩であった。

地蔵が生身で現れることは民俗社会においては「笠地蔵」等の昔話に継承、反映している。地蔵信仰における現世利益の諸相、特色の一面を東京都豊島区巢鴨の「とげぬき地蔵」を事例に提示した。

こうした民間における地蔵信仰の性格はインド起源、中国経由經典の撰述、解釈に由来する。祖師における地蔵関係經典の解釈と民衆における現世利益、死後救済の要求を仲介したのはそれぞれの時代の「唱導僧」であった。地蔵信仰を伝播した唱導僧は必ずしも經典を十全に理解していた訳ではない。耳学問で地蔵菩薩の功德・効験を知り、民衆の要求と整合させながら地蔵信仰を再構成して行ったのである。

【論文審査の結果の要旨】

日本語の「坊主」（ぼうず）は僧侶を表すとともに子供、男子を表す。その背景には地蔵菩薩像がある。地蔵像は僧形であり、この世とあの世を結ぶホトケであり、神と仏の間にある子供の存在とも重なり、境界を守るカミとも意識され信仰されてきた最も日本化した仏教の菩薩といえる。従来地蔵信仰に関しては仏教学はじめ浄土教史、民俗学を中心に個別報告も含め膨大な研究蓄積がなされてきた。本論文は、中国唐・宋代から現代日本に至る地蔵信仰の足跡をたどり、なぜこれほどまでに地蔵が日本化し、ポピュラーな庶民信仰のとなったのかを課題とする。外来と土着、神仏交渉史の大問題に正面から挑んだその意欲が第一に高く評価される。

筆者はまず中国から伝来した地蔵関係經典の系譜とその性格を、インドでの撰述『十輪経』、中国での撰述『地蔵菩薩本願経』に上天へ導者、地獄からの救済者、現世利益の施者との性格が見られることを指摘、それを踏まえ中国化した『地蔵菩薩応驗記』から地蔵の功德を①地獄からの救済②現世利益③後生善処への引導とし、以後地蔵信仰の基調となることを論述、地蔵の小僧形、浄土への導者的要素が日本で創説されたことでないことを明証した。日本への仏教伝来が漢訳經典に拠ること、そのことはすでに中国で生活化した中国仏教の輸入ということになる。地蔵信仰の民間信仰化を考える際、盆行事、目連救母伝説に関係する『地蔵菩薩発心因縁十王経』への言及も欲しかった。通称、『地蔵十王預修経』は中国西域で生まれた偽経と言われるが、偽経こそ民衆の要求を反映した有り難いお経ということになる。中国では、十王中の閻魔大王、日本では地蔵がそれぞれ冥府・地獄からの救済者になる異同等からも日本の地蔵信仰の特質が読み取れる

からである。地蔵菩薩は奈良時代では東大寺の例のように虚空蔵菩薩と並祀されて導入された。ミロク上生・下生信仰との関係はあるのだろうか、後の十王信仰から派生する十三仏信仰の成立に絡めて、地蔵（大地、地獄）⇔虚空蔵（天空、極楽）の垂直的世界観における地蔵の位置づけなどが問題となる。奈良、平安時代の地蔵信仰についても概説が欲しかった。

地蔵信仰の日本的受容にあたって、筆者は法然浄土教の登場による地蔵信仰の現世利益の強調を確認するが、やはり基調に地獄からの救済があることを鎌倉新仏教の各宗派における地蔵の位置づけから分析、浄土宗はもとより曹洞宗、時宗系の聖（唱導僧）は地蔵信仰を死者供養に積極的に活用していた実態を論証する。その一方、現世利益として、田植え、病気直し、戦勝など百姓、武士などの要求を取り入れていく様相を諸史料から提示し、今日に至る地蔵信仰の来歴が中世期にあることを示唆している。教理（宗教学）－ 宗教者（歴史学）－ 民俗（民俗学）の三者の視角を合わせ見た成果といえる。しかし、たとえば平安後期などと筆者の時代・年代設定への言及は理解できるが、鎌倉新仏教の祖師の地蔵信仰における宗教史および日本文化史において定説化された年代設定は厳密に踏まえる必要がある。また、浄土教史における井上光貞、地蔵信仰の速水侑など、先行する学説と自身の見解との異同も明らかにしておくことは研究蓄積の多い分野ではことさら重要となる。

地蔵信仰の庶民化、民間信仰化において最も多様な展開を見せた江戸時代に関しては、地蔵説話集の記事を分析、唱導のために新たに奇瑞譚・靈験譚が加わる事例を紹介している。また、路傍の地蔵の197例の詳細にわたるデータを提示しているが、地蔵が道祖神信仰との習合ではなく死者供養を目的としているとの指摘のほか、さらにそれ以外の読み取り、解釈ができると思われる。折角の集成した資料の有効活用が待たれる。江戸町人研究における、『願掛け重宝記』や流行神の研究成果との擦り合わせも必要となる。

本論文では、著者の分析タームとして、「唱導僧」「生身（いきみ）」「職能」などが措定されている。それぞれの定義または解説があれば、さらに説得性を増すと考えられる。逆に、従来地蔵信仰を表した「代受苦」などのタームに対する著者の見解も披露して欲しかった。地蔵信仰の重要な伝播者と考えられる唱導僧については、従来真言系修験の関与を指摘する論などが行われたが遊行宗教者、聖論の成果を含め、今後の補説を是非望みたいところである。民俗方面の資料については、一地域で特徴的に行われている京都の地蔵盆はじめ、東北地方の地蔵憑き、オシラサマ信仰との習合など、また首なし地蔵伝説などに一言があればさらに深化がはかられた。いずれにしる、地蔵信仰という日本の代表的民間信仰に果敢に取り組んだ著者の熱意が各処に認められる論考である。

以上、本論文には将来に望むべき点、改善点はあるものの、地蔵信仰に関係する民俗学・宗教学・歴史学・国文学方面の基本文献の読破、地蔵信仰にかかわる史・資料の博搜、関係箇所への現地調査による諸資料の総合化とその分析により、地蔵信仰の日本的受容の諸相を学際的・総体的に取り上げた実証内容が具体的に披瀝されている。日本の民間に最も受容された菩薩である地蔵信仰の庶民化の要因を諸資料に基づき歴史民俗学的視角を中核に学際的に明らかにした労作といえ、博士（歴史民俗資料学）の学位論文にふさわしいものと審査員一同これを認めるものである。